

# 人は死なない

矢作直樹 S56 年金沢大学医学部卒業 平成 11 年東大教授

平成 13 年 東大・大学院医学系研究所医学部救急医学分野教授及  
び医学部付属病院救急部・集中治療部部長現職

小学校 3 年生の時、自転車で車にはねられ意識不明で入院、退院時に医師から小学校卒業までに亡くなるかもと言われた。

医師になった理由「免許モノ」で潰しが聞く職業が無難と思った。

{ 現代医学の限界 }

「容態が急変して亡くなる人」「予想を超えて命をつなぐ人」医師はあらゆる総合である存在としての生命について知っていることは実を言うと本当に限られたもの。

米国の総合医療の提唱者アンドル・ワイルは近代医学に欠けている全体を見るという立場で「人は心で治る」と力説

1993 年に米国では国立衛生研究所 (NIH) に代替医療事務局 (OAM) が設置され 1999 年には国立相補代替医療センター (NC CAM) として NIH の 25 番目の独立組織となった。

研究対象は鍼、アロマ、アユールベーター、カイロプラクティス、サプリメント、電磁気、ホメオパシー、マッサージ、心理療法、瞑想、気功、レイキ、ヨガ、イメージ療法、生体自己制御、祈り

{ 非日常的な現象 } いずれも矢作医師が直接本人から聞いた話

B さんの場合～自分の中に入り込む他者

10 階建てのマンションの植え込みに転落、生来「金縛り」にあうことが多く、自分の中に他者が入って（良人になる人は分かっていた）明らかにおかしい、

一人にしておけないと実家に帰っていたが母親が留守の時に意識のないまま自宅のマンションに帰り飛び降りていた、気が付いた時には落下していた、墜落後意識が回復するまで自分が暗く冷たい海の底のようなどころにいて「あなたは此処に来るべきではない」と云われて急に光が見えたと思ったら目が覚めた、ICUでの闘病中は必死で「治そう治そう」と思っていた。

### Cさんの対外離脱体験 50歳代男性（会社経営者）

妹さんを助手席に乗せ帰宅を急いでいて雨上がりの路面でスリップ、車が空中にとんだところで意識がなくなり気が付くと妹と並んで車の後10メートル位上から自分の自動車が横に倒れ電柱に巻き付き大破していた、空中の私と妹は上半身が浮かび上がっていた、突然妹が「お兄ちゃんは戻りなよ」といった！瞬間、私は車の中で目が覚めた、やがて救急車が来たが妹は頭を電柱に直撃して即死だった、妹は事故の前日に家族で食事をしていた時「私の戒名はどうなるの」と云っていた、後日談でCさんは12年後に17歳の長男をバイク自損事故で亡くされたが、その日の深夜に足音がしたのでドアを開けると長男がそこに立っていて「僕のバイクは？僕のバイクは？」と聞いてきた。

### Dさんの対外離脱体験

7歳の時自転車ごとトラックの後輪に巻き込まれた、気が付いたら数メートル上から真っ赤に染まった私を両手に抱えたトラックの運転者が立っている光景が見えた、次に気が付いたら手術台の上にあった。

### 登山家メスナーの不思議な体験

ディアミール壁を下降中に800メートル墜落したとき、自分の体から魂が離脱したことを意識、自分の体が山を転がり落ちていく所をはっきりと目の当たりにして、もう一人の冷静な自分が存在することに気が付いた。

### { 臨死体験 }

終末医療の創始者エリザベス・キューブラ・ロスによるものは一般的に知れ渡った、レイモンド・ムーディ（バージニア医科大学博士）の最初の著作「垣間見た死後の世界」は世の中に驚くほど好意的に受け入れられた。

その後出版された「光の彼方に」の中には臨死体験とは以下の10項目の内いくつかを体験することと定義されている。

- ① 自分が死んだと云う感じ
- ② 安らぎと苦痛からの解放
- ③ 肉体離脱体験

- ④ トンネル体験
- ⑤ 光の人々
- ⑥ 光（最高位の光の存在と遭遇）
- ⑦ 一生を振り返る
- ⑧ 急に天空に上る
- ⑨ 戻ることに対するためらい
- ⑩ 時空の感覚がなし

マイクル・セイボウの大規模な前向き研究「あの世からの帰還」の中では厳密にモニタリングした状況下で明らかに脳の機能が停止した状態における「臨死体験」が詳細に描かれている。

#### { 東大物理学を専攻した「坂本正道」の体外離脱経験 }

偶然経験した体外離脱体験を自著「対外離脱体験」で自分は徹底した物理学者であり精神活動他全ての現象は物理とエネルギーで説明できると固く信じていたが「人間の本質は肉体から独立して存在する非物質のものであると感得した」との彼の客観的かつ詳細な記述は非常に説得力があります。

#### { 矢作教授自身・登山で最初の墜落 }

昭和54年3月冬期登山、1ヶ月分の食料と燃料で40kgの荷物、途中で吹雪、鹿嶋槍北峰稜線で雪庇を踏み抜き600m余り斜度60~70度の大雪壁を数十メートル毎に雪面に衝突しながら墜ちた（距離にして1200mを数十秒）強烈な衝撃を受けて止まり、無我夢中でもがいて雪の上に頭を出せた、体中に痛みと痣だらけで九死に一生を得た。

#### { 二度目の失敗・滑落 }

同年十二月性懲りもなく再登山、針ノ木岳頂上直下の雪壁を登っていて滑り落ち450m斜度33度の谷を一気に滑り落ち左膝の痛みを泣く思いをこらえて降りた、連続して二度目の失敗にも拘らず来年に再挑戦を考えながらバス停近くで立ち止まっている時、突然に岩小屋沢岳の方角から「もう山は来るな」という笹の様な声が聞こえてきて、瞬間全ての思考が停止、暫くして肩の力が抜けて気楽になり「山はもう止めた」と即断、30年たった今も時折、あの体験は何を示唆していたのか、なぜ2度も助かったのか、あの声は何だったのかと・・・そのとき以降、無我夢中で仕事に没頭することとなった。

## { 医療における利他の実践 }

東大医学部の学生さんや若い医師に接する機会ができて驚いたことは彼らの中に「自分の身内は絶対に東大病院に入院させたくない」という人が少なからずいたということ、平成12年秋に救急医学講座及び救急部に声がかかった、辞退したにも拘らず選考会に出るように言われた。

選考会では「病院の基本機能として病院を挙げて救急医療に取り組む」ことを認めていただきたいと・・・

結局異動が決まったとき、どうせやるなら職員の誰もが「自分の身内は絶対に東大病院に入院させたい」と思えるような職場にしたいと思った、そして自分の体を張って現場で今自分ができることをやっていると13年7月に異動し、救急外来だけでなく新病棟も管轄となってICUが動き出した、現在一般外来に来る患者さんは年間80万人、平成15年には院内救急コール体制を敷いた、いざコールがあると日中に多い時には100人を上回る医療スタッフが無心に飛んでくる、今では24時間365日総合救急診療・教育できるようになった。

平成22年には東京都から救急救命センターの認定を受けた。

東日本大震災では合計138名の医療スタッフが現場で医療支援と後送されてきた患者本人の受け入れ・被災地への物資搬送。

今では利他行為としての医療の実践で当院は確かに良い方向に向かっていると確信しています。

## { 人は死なない }

「人は自分に与えられた体を受け入れ、その声を聴き、精一杯生かすことで感謝の気持ちをもって生きていかれる」は真理だと

寿命が来れば体は朽ちるという意味で「人は死ぬ」が靈魂は生き続けるという意味の「人は死なない」と私は考えています。